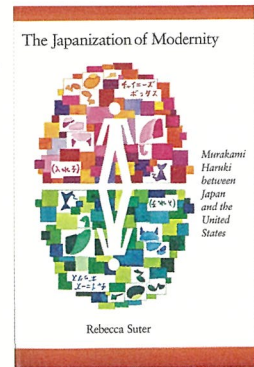


Does borderless mean americanization?

— Rebecca Suter. *The Japanization of Modernity: Murakami Haruki between Japan and the United States*. Cambridge, MA. and London: Harvard University Asia Center, 2008. —



堀口 真利子

2011年10月25日、村上春樹の最新作『1Q84』の英語版が米国で発売された。発売を前に、米誌『ニューヨーク・タイムズ・マガジン』には、サム・アンダーソンによる村上春樹のロング・インタビューが大きく掲載されている¹。作家と翻訳家の二つの顔を持つ村上の作品は、ユネスコによる翻訳データベースに関する統計で、海外に翻訳された日本文学のトップ10のうち第3位を占めるほど高い人気を博している²。ちなみに、第1位は日本を代表する漫画家・イラストレーターの鳥山明(320点)、次いで三島由紀夫(277点)そして、村上春樹(216点)である。川端康成、谷崎潤一郎、大江健三郎、井上靖のいわゆる文豪もランクインしているが、圧倒的な数でこれらの作家を抜く村上の海外での人気には驚かされる。日本でも、2009年5月から発売された『1Q84』は、現在3巻総計380万部を超え³、『1Q84』現象といわれるほどの売れ行きをみせている。BOOK3刊行後には、新潮社の季刊誌『考える人』(2010年夏号)が「村上春樹ロングインタビュー」を特集、さらに『夢を見るために毎朝僕は目覚めるのです 村上春樹インタビュー集 1997-2009』(文藝春秋、2010)、『村上春樹 雑文集』(新潮社、2011)と各出版社がこぞって文集を刊行し、村上ファンの心をつかんでいる。

では、国内における最近の村上研究のテーマには、どのようなものがあるのだろうか。主に『1Q84』を中心にユング理論との関わりから論じた河合俊雄『村上春樹の「物語」—夢テキストとして読み解く』(新潮社、2011、8)や、新たな教材価値を見出した初の論集、馬場重行・佐野正俊編『〈教室〉の中の村上春樹』(ひつじ書房、2011、8)、英訳された主要な短編を取り上げ、作品背景を丁寧に説明しつつ徹底的に読み込んだ加藤典洋

『村上春樹の短編を英語で読む 1979~2011』(講談社、2011、8)などがあり、これらは村上作品の魅力を大いに導き出してくれる。

だが一方で、尾高修也『近代文学以降「内向の世代」から見た村上春樹』(作品社、2011、9)では、「解釈過剰の浩瀚な論」になりがちな現在の村上研究のあり方を問い、「文学世代」から「文学以後の世代」を見た違和感を語り尽くす。また、現代のメディア・ミックス、デジタル化世界の中に位置づけて評価しつつも、「自己弁護的な文学論の出口のない自己完結世界」と批判する。河合や尾高のように、ポストモダン文学として村上春樹文学を分析する、その著書としては、例えば、中国において楊炳菁が、その名も『後現代語境中的村上春樹』(中央編訳出版社、2009)というタイトルで刊行した著作を挙げる事が出来る。この著書の書評である、王姿雯の「『ポストモダン文学』としての村上春樹」(『東方』東方書店、2011、9月号)を参照すると、本書は、近代文学における二大テーマ(自己認識と歴史叙述)が、どのように戦後新世代である村上によって再認識され、表現されているのかという問題を、初期三部作『風の歌を聴け』から『海辺のカフカ』までの作品を取り上げて分析するという内容であると察せられる。

村上春樹研究の英語文献では、モダン/ポストモダン文学という視点からアプローチする研究が多く見られる。その一つ、レベッカ・スーターによる『モダニティーの日本化：日本と合衆国の間の村上春樹』(Rebecca Suter. *The Japanization of Modernity: Murakami Haruki between Japan and the United States*.) をここで取り上げてみたい。本書は、村上春樹の日本とアメリカ間における文化的な仲介者としての

役割と、主に短篇小説に集中したテキスト内におけるメタフィクションの技術に焦点を当てて論じている。スターは、現在シドニー大学の教授として、アジアと西洋の間の翻訳と異文化間の表現の問題に取り組み、コロニアリズム、ポストコロニアリズムとグローバリゼーションの従来の見解に疑問を呈している。

彼女は、村上作品をアメリカ文学の一部と見なす。アメリカでの村上人気は、例えば三島由紀夫のような海外における日本近代文学作家とは異なり、日本のエキゾチズムが求められて得られるのではないという。そのうえで、日本—アメリカ文化の交差する表象（クロス・リプレゼンテーション）として村上作品を見ることは、相互に関わる2つの主な議論、モダニティとポストモダニティの問題と、ポストコロニアルとグローバリゼーションの概念の理論に特別な見識を得ることに繋がると考えている。そのため、本書は、前半部においてこれらの主要な概念に関する問題を、酒井直樹や柄谷行人、エドワード・サイードといった日本内外において広範囲にわたる学者の概念を紹介しながら論じている。

村上作品の中には、西洋の映画や音楽、文学の知識を持つキャラクターが登場し、彼らは西洋文化のメタファーを通して現実を説明する。これまで村上は、外国の語彙やカタカナ語の多用を指摘され、外国かぶれの作家として批判されてきた。だが、本書は、第5章で村上春樹の短篇『眠り』を取り上げ、外国文化／文学を用いることで個人のアイデンティティの構図とリアリティの意味を示すテキストとして紹介する。この章の最後で著者は、村上専属の訳者ジェイ・ルービンが翻訳した芥川龍之介の短編集 *Akutagawa Ryūnosuke, Rashōmon and seventeen other stories* (Penguin, 2006) に寄せた序文で村上が、芥川はリアリズムを遠ざけた作家であり、社会にコミットする文学よりも個人やアイデンティティの構造を探究した人であると紹介していることを受け、このことは、作家としての村上の創作姿勢を示唆するものであると述べる。なるほど、村上が芥川作品について繰り返す、日本的土着性と西洋の普遍性の葛藤と確執は、彼自身の関心の表れでもあろう。スターは、主人公が西洋文学を通じて「入れ子構造」のような現実や自己の多様な面を発見するという構図は、柄谷行人が『風景の発見』（『日本近代文学の起源』講談社、1980、8）の中で述べる、明治日本が

西洋〈他者〉との接触を通じて日本〈自己〉を知るという二元論的概念に対して新たな見方を与えることが出来る」と主張する。

これまで多くの批評家は、村上をポストモダニストとして見てきたのであるが、スターは村上を「モダン寄り」の作家とする。この指摘は、本書の特徴の一つと言えよう。村上は、西洋のポストモダン作家がおこなっているように、時間的成熟を錯覚させるような〈ポスト〉という言葉でモダニズムを再確認するのではなく、外国文化との接触がもたらす自国に有利な点を考えようとする。そのため、村上作品は、モダニティの地理的および文化的な性質を前面に出している」と著者は考えている。

この研究の最後で、スターはイマジネーションの力について論じる。村上作品は、既成のリアリティから離れ、イマジネーションを通じて人びとを結び付けるといふ。混沌とした現実を認識させ、互いを結び付けるようなフィクションは、村上にとって文学の重要な力であり、グローバリゼーションの時代、国家間の社会問題に関わるうえで非常にユニークな見解を与えてくれると述べている。さらに、戦後日本文学とは違って村上のテキストは、危険や退廃として西洋を描くのではなく、代わりに、現実の多層的なイメージの構図を西洋文化を用いて表現するのだという。村上は理性的な強制力によって歪められた現実を描くのではなく、イマジネーションを通して読者を他の世界にステップさせ、現実の多様な側面を提示すると指摘して、本書を締めくくる。

イルメラ・日地谷・キルシュネライトは本書の書評 (*Monumenta Nipponica*, Vol.64, no. 1, Sophia University, 2009) で、その独創性を認めつつも、彼女のアプローチと論の展開における解釈のなかで示唆される問いに十分対処していないことを指摘し、本書が主要な概念に関する不適切な寄せ集めになっていると批判する。さらに、複数にもつれたモダニティについての国際的な議論に必要な最近の理論を組み込んだ、バランスのとれた分析の必要性をも指摘している。

近代における二元論、境界線を前提とする従来の構図に第三の新たな視点を認めるため、スターは、〈他者〉を通じ〈自己〉の多面性を発見する村上のキャラクターの構図を当てはめようとする。だが、そもそも彼女が試みる日本／アメリカ間の文化的な仲介者として村上の役割を見る本書の目的の中には、すでにモダニズムの二元論

の構図が示唆されていると言えよう。そして、この研究を価値あるものにしていく世界文学の文脈の中に現代日本文学を位置づける視点を理解するためには、日本／アメリカの二項対立の中だけで議論することは出来ない。両国の文化をまたぐ村上の作家・翻訳者としての立場が境界線を打破すると著者は主張するのだが、村上の中・長編小説に頻出する在日中国人の存在を見落とすことは出来ないのではないだろうか。そして、本書の議論を発展させるには『ねじまき鳥クロニクル』をはじめとする長編にまで目を向ける必要がある。村上作品をモダン／ポストモダンという枠組みから論じる際に欠かせない虚構と歴史の境界を考察するとき、あえて短篇に限定したという本書は、かえって狭い議論に陥っていると思われる。前近代から近代をスキップし、脱近代を描いているところに村上作品の面白さがあるという河合俊雄の主張もあるが、モダン／ポストモダンという二項対立の枠組みを取り払い、そのうえで双方の重層性に目を向ける必要がある。

しかしながら、例えば、村上の経歴に集中し、作品の背景とその繋がりを明らかにするところに特徴を持つ、ジェイ・ルービン『ハルキ・ムラカミと言葉の音楽』（新潮社、2006、9）や、哲学理論に集中した作品論に特徴を持ち、モダン／ポストモダンのフィクションに関わるアレゴリーの理論に言及しながら、おもに村上の前期三部作にみる「シミュラクル」、つまり固有な「現実」を脅かす多層化した「現実」の構造を解き明かした、Michael Seats, *Murakami Haruki: The simulacrum in Contemporary Japanese culture* (Lexington Books, 2006)と比較すると、本書は、日本の今までの村上研究にはないスケールの大きい試みであると言え、前半部に多く議論されているような日本文学史の流れに村上のテーマを位置づけた体系的な研究は、日本における村上研究に新たな視点を与えてくれるだろう。

1

Sam Anderson, "The Fierce Imagination of Haruki Murakami," *The New York Times*, October, 21, 2011, <http://www.nytimes.com/2011/10/23/magazine/the-fierce-imagination-of-haruki-murakami.html>

2

UNESCO, <http://ftp.unesco.org/xtrans/stat/xTransStat.a?VL1=A&top=10&sl=JPN&lg=0> (2011年12月2日最終アクセス)

3

田中光「『1Q84』英語版発売 米各紙に書評、話題さらう」BOOK.asahi.com (2011年10月27日) <http://book.asahi.com/booknews/update/2011102700001.html?ref=reca>